

## 名 祖 動 詞 (句)\*

— 意味の創造 —

松 原 和 馬

ある発話を聴いてその中に現われる表現や語の意味を理解する場合、概略的にいえば、頭に蓄えられている辞書、すなわちメンタルレキシコンを参照して、その語の正しい意味を選び出したり、あるいは、複数の語義の中から、発話の他の部分の意味に照らして、一つの意味に絞り込むという操作をしているといえよう。

これに対して、ある発話に用いられている語の意味がメンタルレキシコンには存在せずしたがってメンタルレキシコンからは知ることが出来ないにもかかわらず、話者の意図する通りに聴者が正しく理解する場合がある。たとえば、つぎの例(1)を基に、この点についてみてみよう。

(1) a. Joe *bottle* the beer.

b. The demonstrators were *bottled* by the spectators.

(1a)の動詞 *bottle* は名詞から、接辞付加規則によらずに造られた、名詞由動詞 (denominal verb) である。その意味は元の名詞の有する顕著な特徴、即ち、物理的特徴 (色、形、重さ、壊れやすさ等)、その起源や通常の主たる用途等に基づいて決定され、元の名詞は動詞の表す状態、出

---

\*本稿は、1994年6月11日(土)に開催された活水女子大学英文学科公開講座「日本語と英語の表現比較」において、Creation of Senses という題で発表した内容に修正加筆したものである。

来事、過程等の意味の中で一つの意味役割を担う。名詞 *bottle* の主要な特徴は液体を容れる容器であり、「場所」としての意味役割が動詞の意味の一部として組み込まれることになる。したがって、このような規則にしたがって造られた動詞 *bottle* は、概略、「ビンに容れる、ビンに詰める」という意味で、構文上、「場所に置かれるもの」を目的語に取る、という情報がメンタルレキシコンに蓄えられているといえる。上例の (1a) の *bottle* はこの意味で用いられているものである。ところが (1b) の場合はこのような意味に解釈することは出来ない。しかしながら、全く解釈が不可能であるというわけではなく、適切なコンテキスト内で用いられれば、容易に解釈することが出来る。たとえば、*The demonstrators were stoned and bottled by the spectators* あるいはさらに *as they marched through the street* というコンテキストを当て嵌めると、この場合の *bottle* は「ビンを投げ付ける」という意味に解せられ、元の名詞 *bottle* は「道具」として動詞の意味の中に組み込まれることになる。このように、頭のなかの辞書に照らして語や表現の意味を選び出す過程と違って、新たに文脈から意味を創造していく場合が存在する。Clark and Clark (1979) はこのようにして造られた言語表現を文脈依存表現 (contextuals) と呼んでいる。本稿はこのような文脈依存表現のうち特に名祖 (eponym) 名詞を元にして派生した動詞表現の例を中心に、英語と日本語の場合を比較しながら、新たに意味が創造されてゆく仕組みを考察する。

まず、Clark and Clark (1979) の研究による文脈依存表現といわれる名詞由来動詞の特徴についてみておこう。彼らは、つぎのようなものを文脈依存表現の特徴としてあげている。

- (2) a. 可能な語義数は無限である
- b. 意味解釈はコンテキストに依存する。
- c. 意味の決定は話者、聴者の協調関係に依存する。

すなわち、新たに名詞から動詞が造られる場合、新しく造られる語の意味は、それぞれ用いられるコンテキストによって異なり、したがってその語の潜在的な語義数には制限がない、というものである。これは代用表現の意味が先行詞に何がくるかによって異なるのと平行的である。そして、新たに造られた語の意味解釈が申し分なく成立するには、話者、聴者の間の協調関係に依存するというものである。すなわち、話者は話者・聴者の間の共通の知識を基にして、自分が意図した通りの意味を聴者が唯一的に解釈できるように使用し、聴者は話者・聴者の相互の知識に基づいて話者の意図した通りにその意味を解釈する、というものである。

ここで重要なのは、話者・聴者の間の共通の知識ということである。この知識は現実界の知識であり、一般的な知識と個別的な知識に分けられる。一般的な知識は時間、空間に関する共通の知識、基本的な物理的な法則に関する知識、事物の素材や機能、用途等に関する知識である。一般的な知識は人間に共通しており、固定している。個別的な知識は、特定のもの、出来事、状態、過程等に関するもので、個人によって違いが生ずる。たとえば、一般的な知識が関係する場合をつぎの(3)を例に考えてみよう。

(3) a. Ed shelved the books.

b. Ed shelved the closet.

通常、棚は、ものを置く場所として使われる場合と、場所に取り付けたり、置いたりするもの、というのが一般的な知識である。この知識を基に動詞が造られると、(3a)のように「本を棚に置く」という「場所」の意味が動詞の意味に組み込まれる場合と、(3b)のように「物置に棚を付ける」という「場所に置かれるもの」が動詞の意味に組み込まれる場合の2通りが存在することになる。個別的な知識が関わる場合は、つぎの例(4)

- (4) a. My sister Houdini'd her way out of the locked closet.  
 b. The mayor tried to Richard Nixon the tapes of the meeting.  
 (Clark and Clark (1979))

にみられる。Houdini, Richard Nixon は固有名詞から派生した名詞由来動詞である。これらの動詞の意味を理解するには、Houdini, Richard Nixon という固有名詞が表しているのはどのような人物か、これらの人物に関わるのはどのような出来事か、といった知識が必要になる。これらの知識が話者、聴者の間で共通に所有されていないと解釈が成立しないことになる。Houdini の場合はハンガリア生まれのアメリカの奇術師で脱出奇術で一斉を風靡した人物という知識が、話者、聴者の間で共有されていなければならない、さらに使用されている文脈から「策略を用いて脱出する」という意味が導出されることになる。Richard Nixon の場合は第37代のアメリカの大統領という知識の他にウォーターゲイト事件に関する際立った印象を与えた行為を承知していなければならない。これにより動詞の意味として「犯罪の恐れのある証拠を消してしまう」という意味が導かれる。

以上みたように、新たに造られる名詞由来動詞の意味は、話者、聴者の間で共有する一般知識や個別知識に基づいて、解釈される。その際、元の名詞は新たに造られる動詞の表す状態、出来事、過程等の意味の中で一つの意味役割を担う。再び Clark and Clark (1979) に基づいて、名詞由来動詞の中で元の名詞がどのような意味役割を担うかその種類をみてみよう。

(i) Placeables; 元の名詞は場所に置かれるものを表し、動詞の意味に組み込まれる (e.g. slipcover the cushion, carpet the floor, sheet the furniture, etc.)。

(ii) Places; 元の名詞は場所の意味役割を表し、動詞の意味の一部として組み込まれる (e.g. doormat the boots, shelve the books, hook the cup, etc.).

(iii) Time intervals; 元の名詞は、出来事や行為が生起する一定の間隔を持った時間を意味する (e.g. winter in California, vacation in Mexico, honeymoon in Hawaii, etc.).

(iv) Instruments; 元の名詞は道具としての意味役割を持つ (e.g. bicycle into town, broom the floor, cane the child, etc.).

(v) Agents; 元の名詞は動作主としての意味役割を持つ (e.g. butcher the cow, jockey the horse, etc.).

(vi) Recievers; 元の名詞は経験者としての意味役割を持つ (e.g. witness the accident, badger the officials, etc.).

(vii) Actions; 元の名詞(固有名詞)に関する際立った行為が動詞の表す意味になる (e.g. to Richard Nixon the tape of the meeting, to Hoover the telephone, etc.).

(i) から (vi) までは一般的な知識に基づいて、動詞の意味の中で名詞がどのような意味役割を担うかということが、最終的にはコンテキストによって決定されるが、予測可能である。これに対して (vii) は固有名詞が表す著名な人物に関する際立った行為という個別的な知識が動詞の意味を決定する。to Hoover the telephone の Hoover は元 FBI 長官 Edgar Hoover のことで、電話の盗聴を命じたことで有名であり、そこから「盗聴器を付ける」という動詞の意味が導かれる。

本稿では、特に (vii) のように名祖 (eponym) 名詞が関係する英語ならびに日本語の事例を基に、新たに意味が創造される仕組みを考察することにする。

英語にはすでに見たように、名祖名詞からいわゆるゼロ派生により動詞を造る場合の他に、名祖名詞が関係するものに、Clark and Gerrig(1983)の研究に見られる名祖動詞句 (eponymous verb phrase)がある。この動詞句の形式上の特徴は、つぎの(5)

(5) [VP do + [NP a Eponym]]

のように、主動詞 do とその後に不定冠詞と名祖名詞を主要部とする名詞句を目的語としてしたがえる。具体例を示すと(6)のようになる。

- (6) a. Please *do a Napoleon* for the camera.  
 b. After Joe listened to the tape of the interview, he *did a Nixon* to a portion of it. (Clark and Gerrig (1983))

名祖動詞句が表す意味の解釈は、動詞句に用いられる名祖名詞に関わる特定の行為 (actions)に関して、話者、聴者が共有する共通基盤 (common ground)によって決定されたとする。Clark and Gerrig(1983)は、話者、聴者が共有する共通基盤として、つぎの(7)のような共通の知識に関する階層構造が存在するとしている。

(7) i. 名祖の身元の確認。

名祖名詞が表している人物の身元に関する共通の知識がなければならぬ。たとえば、(6a)のナポレオンは、ナポレオン一世を指していることの共通認識。

ii. 名祖に結びついている行為。

ナポレオン一世に関する行為としては、フランスを統治した、フランス皇帝についた、モスクワを包囲攻撃した、エルバ島に流された等の行為が考えられる。

- iii. 名祖と関係する行為のうち、ある行為が、話者が発する文の中で、意味をなす。

カメラに向かって取るポーズで、ナポレオンに関する行為、たとえば、顔をしかめる、王冠を載せる、片手をジャケットに入れる等の中から、少なくとも関連のある一つの行為を見つけだす。

- iv. 話者は、発話中で自分が意図した名祖由来の行為を、聴者が直ちに唯一的に識別出来ると、考える。

人がカメラに向かって取るポーズでナポレオンに関する顕著な行為として、聴者は、話者が意図した「片手をジャケットに入れるポーズ」を共通基盤として認識し、そのように解釈する。

このように、名祖動詞句の意味解釈については、ゼロ派生による名祖由来動詞の場合と同様に、まず、名祖に関する知識が話者、聴者の共通基盤となり、聴者は話者の意図した意味を築いてゆく。

- (8) a. Please do a George Conklin for the camera.  
 b. Please do a Homer for the camera.  
 c. Please do a Franklin Delano Roosevelt for the camera.  
 d. Please do a Napoleon for the camera.

(8a) において、George Conklin は何者か不明である、したがってどのような行為が関わっているのかも不明である。(8b)、(8c) においては、Homer や Roosevelt はどのような人物か知っていてもどういう行為と結びつくのか不明である。(8d) については、ナポレオン一世の肖像画は大抵片手をジャケットに入れたポーズで描かれているので有名であることから、カメラに向かって取るポーズとして理解される。

そして話者、聴者の間に意図したとおりの適切な意味を成立させるために、コンテキストの使用が重要な意味を持つ。

(9) a. Please do a George Conklin for the camera.

b. Please do a George Conklin for me.

(9a) において、George Conklin が誰か不明であっても、for the camera というコンテキストからカメラに向かって取るある種のポーズを尋ねていることが理解される。これに対して、(9b) の for me ではコンテキストとしての情報が不十分であり、意味の絞り込みが出来ない。このようにコンテキストの適切な使用が話者の意図した意味を聴者が唯一的に絞り込む助けになる。

さらに、名祖名詞に関する行為については、際立ち (salience) という概念が重要である。すなわち、その人物にまつわる非常に impact の強いものでなければならない。その人物の行為の際立ちが二人の人間の間だけに限られる場合もあるし、大勢の人間の間で知られている場合もある。共通の基盤 (common ground) が出来るだけ大勢の人間の間で、出来るだけ長い期間成立していれば、それだけその意味は長く定着することになるといえる。逆に、共通基盤が限られた人間の間でしか成立していない場合は、その意味が定着する度合いは少なく、直ぐに人の記憶から忘れられるこ



とになる。たとえばつぎの例を考えてみよう。

- (10) a. I met a girl at the coffee house who did an Elizabeth Taylor while I was talking to her. (Clark and Gerrig (1983))
- b. I met a girl at the restaurant who did an Elizabeth Taylor to the chicken.
- c. Hitler did a Napoleon to Poland in 1939. (Clark and Gerrig (1983))
- d. The Shah of Iran did a Napoleon to an island off Panama in 1980. (Clark and Gerrig (1983))
- e. John stood by the river and took a coin from his pocket and did a George Washington.
- f. John took an ax in his hand and did a George Washington to the tree.

(10 a) の Elizabeth Taylor については、たとえば、standing, flirting, behaving like a shrew, pouting, looking Cleopatra-like 等の行為が考えられるが、その中のどの行為も (10 a) のコンテキストの中では他の行為と比べて特に際立った行為とはいえない。(10 a) のコンテキストにはどれが関連のある行為かひとつに限定することが出来ない。したがって、この場合の do an Elizabeth Taylor はどのような意味か明らかでない。(10 b) については、Elizabeth Taylor が一時期ノイローゼ状態にあり、その時の彼女の特に際立った振る舞い、奇行が共通基盤になっているものの間では、do an Elizabeth Taylor は (10 b) のコンテキストでは「手掴みで食べる」という意味に解釈される、という。<sup>1</sup> しかしながら、この共通基盤について

<sup>1</sup>この議論は、Pitzer College の Tom Manley 氏との個人談話に負っている。

は、これを共有する人間の数や持続時間に限界があり、この解釈が一般的に且つ容易に想起されるとは言い難い。(10c-d)については、ナポレオンについて歴史的に知られている際立った行為が大勢の人の共通基盤としてあり、その行為の中から、適切なコンテキストの働きによって、名祖動詞句 *do a Napoleon* はそれぞれ “conquer by overrunning”, “go into exile” という意味に絞り込まれる。(10e-f)についても同じように、歴史上の人物 *George Washington* に関して一般的に知られている際立った行為を基に、適切なコンテキストの助けにより、「コインをなげる」、「木をきる」という意味が導きだされる。

以上見たように、際立ちという概念は話者、聴者、その時の両者の共通基盤等によって異なり得るもので、相対的なものである。またある行為がもっとも際立った行為であると大勢の人の共通基盤となっているほど、その行為は直ぐに容易に想起出来ることになる。さらにその行為が際立ったものになるためには、その行為は派生元の名祖名詞と密接に結びついていなければならない、ということになる。

それではつぎに、日本語の場合についてみてみよう。日本語においても、名詞に動詞の時制辞「る」を付加して動詞を造る方法や名詞に動詞「する」を結合させて複合動詞を造る方法が存在する。特に後者の方法を用いて動詞を造ることは、下例(11) - (12)が示すように、普通にみられるところである。

- (11) a. 勉強、研究、約束、料理、報告、運動、調査  
 b. 出火、送金、来店、離日、発車、帰国、水死  
 c. 飲食、往復、愛用、追求、開閉、昇降  
 d. タイプ、ダンス、コピー、スキー

(影山(1980))

- (12) a. 茶摘み (茶を摘む)、種蒔き (種を蒔く)、稲刈 (稲を刈る)、  
草取り (草を取る)、腰掛け (腰を掛ける)、雪掻き (雪を掻く)
- b. 手書き (手で書く)、ペン書き (ペンで書く)、アイロンかけ  
(アイロンをかける)、雑巾かけ (雑巾をかける)、ペンキ塗り  
(ペンキ塗る)
- c. 陰干し (陰 {で、に} 干す)、箱詰め (箱に詰める)、ビン詰め  
(ビンに詰める)、壁塗り (壁を塗る)

(11 a - c) の場合は、漢語動詞から派生した動名詞である。(a) の場合の特徴は、各複合語を形成している要素はそれぞれ独立した概念をもっていることである。(b) の特徴は、複合名詞の第1構成素は動詞の役割を果たしており、2番目の構成素は目的語名詞の役割を果たしていることである。(c) は、両構成素共に動詞の働きを持っており、これが結合して複合名詞を造っている。(11 d) の特徴は、いわゆる外来語である。これらの各名詞に動詞「する」を結合させて複合動詞が造られる。

(12) の場合は、括弧内に示したような表現から派生した複合名詞と考えることが出来る。(a) の場合の特徴は、元の表現において「場所に存在するもの」という意味役割を果たしていたものを複合語の第1要素として組み込んでいることである。(b) の場合は、元の表現で「道具」という意味役割を担っていた要素を、複合名詞の第1構成素として組み込んでいる。(c) の場合は、「場所」の意味役割を第1構成素として組み込んでいる。これらの複合名詞についても動詞「する」を結び付けて動詞化することが出来る。

動詞活用語尾「る」を付加して動詞化する場合についても、つぎの例 (13) が示すように日本語に存在する。

- (13) a. 事故る (事故を起こす)  
 b. トラブる (トラブルを起こす)  
 c. 激る (過激なことをする)  
 d. 蛇尾る (最初は気合いが入っているが、すぐにやめてしま  
 うこと)  
 e. 補助る (スクールバスで普通座席に座れず補助席に座ること)

以上のように、日本語にも英語のゼロ派生に対応する方法や [do+a Noun]構造に類似の動詞化の方法が存在する。しかしながら、日本語の[複合名詞+ [する]]は、英語の場合のように動詞句というより、複合動詞と考えることにする。<sup>2</sup>

これら2通りの動詞を造る方法を用いて、名祖名詞から動詞が造られる例は、米川 (1995 a, b) によれば、明治時代から存在したという。

- (14) a. ジゴマる (悪性のいたずらをする)  
 b. ゴンべる (海軍収賄事件の山本権兵衛から、賄賂をとる)  
 c. ハラケる (原敬から、うそをいう意)  
 d. シデハる (幣原外交から、控えめで弱気なこと)

(米川 (1995 a, b))

現代の日本語の例については、月刊『言語』に連載中の榊原の「世相語散歩」や『日本語学』に連載された既出の米川の「若者語の世界」に紹介されている。日本語のこのような例の形成についても英語の場合と同様に考

<sup>2</sup>影山 (1980) は、VN(動詞的名詞)を動詞「する」の前にチョムスキー付加するS編入操作によって造られる複合動詞と分析している。本稿もこれにしたがう。

えることが出来よう。すなわち、名祖名詞に関する個別知識がまず話者、聴者の共通基盤としてなければならない。そして、名祖名詞に纏わる行為が際立っていればいるほど共通基盤として定着しやすくなる。しかも大勢の人の中で共通基盤になっているほど定着の度合いは高くなるといえる。逆に共通基盤となる行為の際立ちの度合いが低い場合や共通基盤が限られた人の中でのみ成立している場合は、定着の度合いは低く、また時間の経過等によって一時的ですぐに忘れられてしまうことになる。以下に、過去何年間かに現われた名祖名詞から動詞化された例の中から二三のものについてその成立過程をみてみよう。

- (15) a. 伊東する (固辞する)  
 b. 中曽根る (ウソをつく) (榊原(1987))  
 c. 宮沢る (必ずやるといってなにもやらない) (榊原(1993))  
 d. アグネスする (子連れ出勤/外出する) (榊原(1988))  
 e. 江川る ((1978年)のプロ野球江川投手の巨人入団をめぐるゴタゴタから、我侭を押し通す) (榊原(1987))  
 f. チチヨる (来日したイタリア女優、チチヨリーナから、やたらと肌を露出する) (榊原(1989))

(15a) の伊東は故自民党国会議員伊東正義のことで、外務大臣や総務会長をつとめた。1987年7月リクルート事件が発覚し、1989年竹下登内閣総理大臣は辞任に追い込まれた。伊東は後継首相として就任を懇願されたが、リクルート事件に連座した他の大臣連中も辞任しないかぎり首相だけを替えても中身は同じことと、再三の首相就任の申し出を頑なにはねつけた。筋が通らねば首相就任を懇願されても断固拒否する伊東の気骨ある行為から、「固く拒否する」という意味がうまれることになった。(b-c) についても、これらの動詞が形成されることになった事情は、当時の新聞、テレ

ビ等の報道で一般に知られている。中曽根は首相在任時の選挙中に売上税は導入しないと一般に公約しておきながら、自民党が選挙で圧勝するとこれをやろうといいだしたことから、「公約違反、うそをつく」という意味が生じた。<sup>3</sup> 宮沢は政治改革を約束して海部内閣を引き継いだが、総理大臣になると何ら手を付ける気配を示さなかった。しかし世間の事情や党内の事情から政治改革をやらざるをえないような情勢になり、「総理と語る」というテレビ番組で「政治改革は必ずやる、ウソはつかない」と公言することになった。しかしそのすぐ後で政治改革はやらないといいだしたことから、「公約違反をする、うそをつく」という行為が共通基盤となった。(d)のアグネスとはアグネス・チャンのことで、何処へ行くにも自分の子供を連れていくことから、この意味が生じた。彼女の行為を一段と際立ったものにしたのは、アグネス・チャンが子連れで出掛けることに関して、反対派の筆頭林真理子と擁護派の冥王まさ子等が『文芸春秋』、『群像』等の雑誌に自説を发表或し、女性週刊誌では反対派、擁護派の立場で読者に議論に参加するように呼び掛ける等かなり議論が加熱したことによる。<sup>4</sup> (e-f)については括弧内に示されている固有名詞の行為が当時いづれも世間を騒がせ、かなりの人の間で共通基盤となったことによる。

以上、名祖名詞由来動詞(句)について、英語、日本語の例を基に、新たに意味が創られる過程を考察した。英語、日本語に共通して指摘できることは、これらの動詞(句)の意味はもともとレキシコンには存在せず、話者、聴者の協調関係に基づき、新しく創りだされるということである。そのためには話者、聴者の共通基盤として、名祖名詞に関する個別知識、特に直ぐに想起可能な際立った行為が存在しなければならない。そして名祖名詞とそれから想起される行為の際立ちの度合いが大きければ、また大

<sup>3</sup>神原(1987)参照。

<sup>4</sup>神原(1988)参照。

勢の人の間で共通知識になれば、それだけ共通基盤として成立しやすくなり、話者、聴者間の意味の創造も容易になるといえよう。

### References

- Clark, Eve V. and Herbert H. Clark 1979. When nouns surface as verbs. *Lg.* 55. 767-810.
- Clark, Herbert H. and Richard J. Gerrig 1983. Understanding old words with new meanings. *Journal of verbal learning and verbal behavior.* 22. 591-608.
- 影山太郎 1980. 語彙の構造 松柏社。
- 榊原昭二 1987. 世相語散歩・87 月刊『言語』Vol. 16. No. 5. 大修館書店。
- 1988. 世相語散歩・88 月刊『言語』Vol. 17. No. 8. 大修館書店。
- 1989. 世相語散歩・89 月刊『言語』Vol. 18. No. 2. 大修館書店。
- 1993. 世相語散歩・93 月刊『言語』Vol. 22. No. 8. 大修館書店。
- 米川明彦 1995a. 若者語の造語法(下)『日本語学』Vol. 14. No. 2. 明治書院。
- 1995b. モノ・コト・ヒトの表現と連想 『日本語学』Vol. 14. No. 5. 明治書院。

1996. 1. 31. 受理